



甲虫ニュース

No. 132

December 2000

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 7¹⁾

高 桑 正 敏

コホシハナノミ属 *Curtimorda* MEGNIGNON

Curtimorda MEGNIGNON, 1946, Revue fr. Ent., 13: 58 (type species: *Mordella bisignata* REDTENBACHER).

体は小さく太型、鞘翅は微毛紋で飾られ、尾節板は三角形で短く、尾節端を少し越す程度、その背面は平圧されて隆起がごく弱い。その独特な体型と尾節板から特異な感を抱かせるが、触角や雄交尾器などの特徴からは明らかに次属に近い。ユーラシアに少なくとも2種が分布し、日本産は次の1種が知られる。

キノコホシハナノミ *Curtimorda maculosa* (NAEZEN)

Mordella maculosa NAEZEN, 1794, Vetensk. Akad. Nya Handl., 15: 273, pl. 9, fig. 6.

体長 3.5-4 mm 前後。背面は微毛から成る多数の小白斑を散らす。複眼は短毛を粗生し、触角は頭部幅より短く(雄で 0.9:1)、5節以降は強い鋸歯状、第4節は3節とほぼ同長、5節より短く、鞘翅は基部幅の 1.6-1.7 倍、各端は非常に広く丸まる。前・中附節の各節端は端方向に向かうほど湾入し、4節端は深く湾入する。雄第8腹板は薄くほぼ円形、端突起は台形状、第8背板より短く、雄交尾器は中葉片が非常に長くて鞘翅とほぼ同長、側葉片の左片は頑強で膜質状突起を欠き、右片は葉状突起の分だけ左片より長く、葉状突起はキチン化が弱くて

膜質状。雌雄の形態差は顕著でないが、雌は尾節板がより短く、尾節の端中央は明瞭にえぐられることで区別できるほか、前附節と前脛節がより細く、触角第6節以降と小顎肢末端節が強く丸みをおびる。

日本では北海道から九州にかけて広く分布しているが、九州では福岡県の1例しか知られていないようである。ブナ帯での採集例が多いが、もともとシイ・カシ帯にも生息するものらしく、東京都内はじめ関東平野各地、名古屋市内などでも採集例がある。成虫はカイガラタケ類に集まり、幼虫はこれを食べることで知られる。ヨーロッパ産と日本産とは斑紋などにわずかな差が認められる程度のものである。なお、HORÁK (1995) は中国南部から記載された種を本種のシノニムとした中で、ヨーロッパと東アジア産とは色彩がやや異なるものの、区別する必要がないと述べている。しかし、HORÁK が示した図から判断する限りでは、中国南部産と日本産とは同種とは思えないほど前附節の太さが異なっている。

分布: 北海道, 本州, 四国, 九州; ヨーロッパ [基準産地], ロシア東部, サハリン, 朝鮮, 中国南西部 (雲南・四

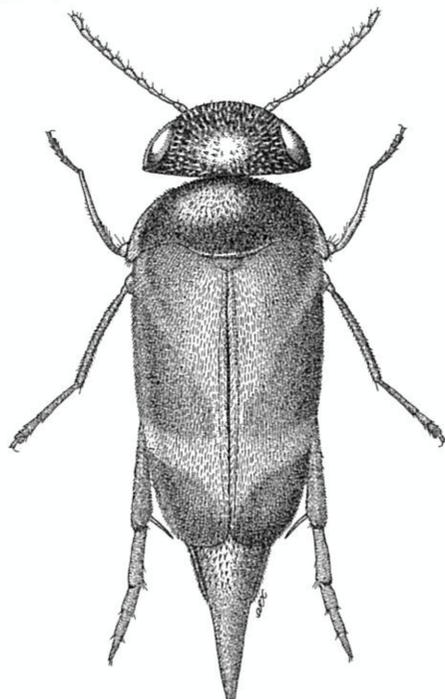


図1. カタジロハナノミ *Mordellaria latior* NOMURA, ♂, from S. Ryukyus (川島逸郎氏描画)。

川省)。

コハナノミ属 *Mordellaria* ERMISCH

Mordellaria ERMISCH, 1949-50, Ent. Bl. Biol.

¹⁾ TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 7.

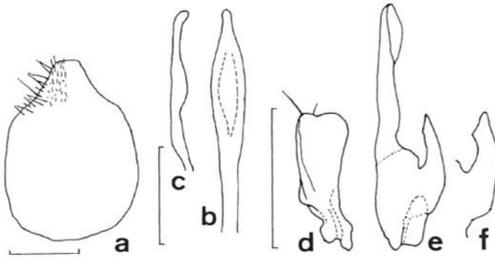


図 2. キノコホシハナノミ *Curtimorda maculosa* (NAEZEN). a: 第 8 腹板, b: 交尾器中葉片 (先端部), c: ditto (側面), d: 交尾器左側葉片 (内面), e: 交尾器右側葉片 (内面), f: ditto (左側面). Scales: 0.25 mm.

Syst. Käfer, 45/46: 69 (type species: *Mordella scripta* FAIRMAIRE).

体は小さく多少ともやや太型, 背面にはふつう白〜金〜赤などの微毛紋をもつ。複眼は短毛をややまばらに生やし, 触角は第 5 節以降が鋸歯状, 後脛節と第 1 後跗節上部にはしばしば刻条を現し, 尾節板はふつうやや長くて端半が細まるが, 端は鋭く尖らない。前・中跗節の第 4 節は先端がほぼ切断状のものから二葉状を呈するものまである。第 8 腹板は小さくて縦長, 背板より短くてその側部をわずかに被う程度, 雄交尾器の中葉片は非常に長く, 左片は頑強で膜質状の葉状突起を備え, 右片の葉状突起は膜質状。前属とは雄交尾器も含めて形質傾向が多くの部分で共通しており, かなり近い系統関係にあるものと考えられる。

成虫は朽ちた木や林内空間の葉上に見られ, また花上で採集されることのある種もあるが, ふつうは非常に得難いものばかりである。南アメリカのチリ産の種をタイプ種として創設された属だが, ユーラシアとアフリカに多数の種類が分布しているようである。日本産は 10 種以上が認められるものの, 採集例がきわめて少ないうえに雄が未発見のケースも多く, 未発表のままの種類がいくつかある。このため, 既知種は次の 7 種にすぎない。これらは種への検索表で示すように, 第 4 前・中跗節と雄前脛節などの形状から, 大きく 2 群に分けることができる。なお, 野村 (1963) は北隆館の原色昆虫大図鑑 2 巻において, 6 種のみごとな原色図を掲げているので参照されたい。

種への検索表

- 1. 鞘翅は肩部が非常にあざやかな黄ないし赤色; 雄前脛節は単純で直線状; 前・中跗節は細く, 第 4 節は幅より長くて端は比較的浅く湾入する2
- 鞘翅は肩部や端部が多少とも明色がある場合もあるが全体がほぼ黒〜暗色, 微毛から成る紋をもつ4
- 2. 鞘翅中央後方の淡黄帯はやや不鮮明, 幅広く側縁に届くカタモンハナノミ

- 鞘翅中央後方の金紋は側縁にまったく届かない3
- 3. 鞘翅中央後方の金紋はほぼ縦横同長またはやや横長の円形ないし四角形; 小顎肢末端節の前縁は内縁より長いか同長; 触角はより細く, 各節は幅より長いアカカタハナノミ
- 鞘翅中央後方の金紋は明らかに縦長, しばしばごく幅狭い; 小顎肢末端節の前縁は内縁より短い; 触角はより太く, 第 6-10 各節は幅とほぼ同長ゼンチハナノミ
- 4. 触角はより太く, 第 6-10 各節は強い鋸歯状で幅とほぼ同長, 内端は鋭く尖る; 雄前脛節は内方に曲がらず, 基部に不明瞭な剛毛群を備える; 前・中跗節はより細く, 第 4 節は幅より長くて端は比較的浅く湾入する5
- 触角はより細く, 第 6-10 各節は弱い鋸歯状で幅より長く, 内端は鈍い; 雄前脛節は内方に曲がり, 基部に明瞭な剛毛群を備える; 前・中跗節は太く, 第 4 節は幅とほぼ同長か短く, 端は深く湾入してほぼ二葉状6
- 5. 鞘翅の金〜灰金色微毛紋は比較的明瞭, 前方に w 紋, 中央側方に小紋, 後方に横帯紋をもつ; 尾節板は長く, 端半はむしろ細い棒状アラキハナノミ
- 鞘翅の黄〜紫金色微毛紋は不明瞭, 肩部と会合部だけに現れる; 尾節板は短く, 端半はむしろ楔状ミツモンハナノミ
- 6. 体は長い; 鞘翅は 3 本の縦の黄赤色微毛紋をもつハナノハナノミ
- 体は非常に短い; 鞘翅は肩部と後方に白黄〜金色微毛紋をもつカタジロハナノミ

アカカタハナノミ *Mordellaria aurata* (Kôno)

Mordella aurata Kôno, 1928, Trans. Sapporo nat. Hist. Soc., 10: 36, fig. 2C.

体長 4 mm 前後。鞘翅の暗色毛は紫桃色光沢を強く帯び, 肩周辺から内へ向かう斜帯はあざやかで地色との境は明瞭, 後方へと広がらない。小顎肢末端節の前縁は内縁より長いか同長, 触角は通常全体が黄褐色で 5 節以降は多少とも暗化する。尾節板は細長く, 背面は十分に隆起する。後脛節と第 1 後跗節上部には弱い刻条が認められる。雌雄の形態差は顕著でない。

北海道から九州にかけてやや局地的に記録されており, 本州ではブナ帯に生息するが, 大阪府箕面や高梁市臥牛山など低山からも記録がある。また, 国立科学博物館には九州南端の佐多岬産の雄個体も所蔵されており, これが野村 (1963) が九州新記録とした標本と推測されるが, 本州産とは交尾器も含めて形態差は意外と少ない。成虫は立ち枯れ木や朽ち木にて採集されており, 筆者は木製のベンチの板裏に集まっていた数個体を採集した経験がある。後者はキノコホシハナノミと同時に得られたもので, 菌類を食していた可能性が強い。北海道ではヤチダモの落枝より 10 月に脱出したという記録があり, また

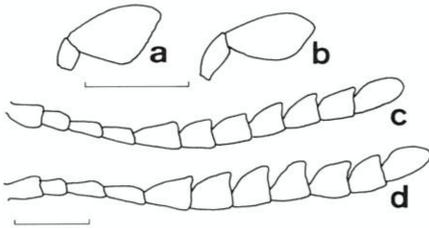


図3. コハナノミ属2種の右小顎肢末端2節(♀腹面: a, b)と右触角(♂: c, d). —a, c: アカカタハナノミ *Mordellaria aurata* (KONO); b, d: ゼンチハナノミ *Mordellaria zenchii* TOKEJI. Scales: 0.25 mm.

筆者の手元には本州産のヤチダモおよびズミから脱出したという標本がある。四国での記録はまだないと思われるが、愛媛県産の標本を検したことがある。

分布: 北海道, 本州 [基準産地], 四国 (未発表), 九州。

ゼンチハナノミ *Mordellaria zenchii* TOKEJI

TOKEJI, 1953, *Chûhō*, Tokyo, (8): 4, pl. 1, fig. a.

体長4-5 mm。前種とよく似た形態を示すが、鞘翅の暗色毛は青または暗紫色光沢を帯び、肩紋は後方へと広がり、地色との境はかなり不明瞭、後方微毛紋はほとんど消失する場合があります、小顎肢末端節の前縁は内縁より短く、尾節板と尾節との比はより大きい。

北海道から本州中部にかけて記録があり、本州ではブナ帯に集中している。文献上の西南限記録は福井県と岐阜県だが、紀伊山地からも得られている。九州産の標本も検しており、すでに原色日本甲虫図鑑3巻には本種の分布地として九州が加えられている

が、正式にはまだ記録されていない。前種とほぼ同様な環境に生息し、同一の枯れ木で得られることもある。図示した分布図は多くの未発表資料も加えてあるので、近くこれらを別に発表するつもりである。

分布: 北海道, 本州 [基準産地], 九州 (正式には未発表)。

カタモンハナノミ *Mordellaria humeralis* NOMURA

NOMURA, 1961, *Tōhō-Gakuhō*, Tokyo, (11): 76.

体長3 mm前後で、小型種から成る本属にあってはもとしまわ小さい。頭部は前方ないし前半部が黄赤色、鞘翅の肩からの黄赤色斜条部はあざやか、中央後方の淡黄色微毛から成る横帯は不明瞭だが少なくとも会合部と側縁部で非常に太い。小顎肢末端節の前縁は内縁より短い。触角第6-10各節は幅と長さかほぼ同長。

採集例は非常に少なく、奄美大島産の正基準標本(雌)以外には徳之島と沖縄島からの各1頭を知るにすぎない。徳之島産はタブノキの材から脱出したもの。

分布: 奄美大島 [基準産地], 徳之島, 沖縄島 (未発表)。

アラキハナノミ *Mordellaria arakii* (NAKANE et NOMURA)

Mordella arakii NAKANE & NOMURA, 1950, *Trans. Kansai ent. Soc.*, 15: 13, fig. 7.

体長3.5-4.9 mm。鞘翅には基部のw紋、中央側部の1対の縦長紋、それに後方の横長の微毛紋を現すがかなり変異がある。触角は1-4節が黄褐色、5節以降が黒褐色、5-10節は強く鋸歯状、各節は幅とほぼ同長、5節は6節と同形。尾節板は本属として

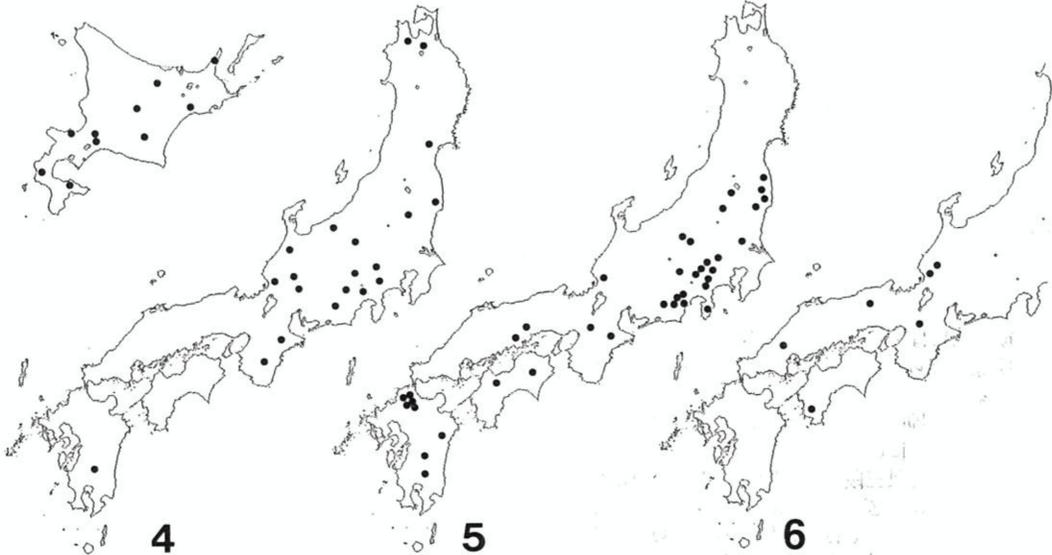


図4. ゼンチハナノミ *Mordellaria zenchii* TOKEJI の分布。
 図5. アラキハナノミ *Mordellaria arakii* (NAKANE et NOMURA) の分布。
 図6. ハナノミ *Mordellaria hananoi* (NAKANE et NOMURA) の日本における分布。

はかなり短く、尾節の約2倍、端半は急に細まり(雄でとくに顕著)、先端は鈍く尖る。前・中跗節の第4節端はやや深く湾入し、後脛節と第1後跗節上部には刻条を欠く。雄は前脛節の基部前縁にわずかな剛毛群を備える。

本州から九州にかけて広く分布するようだが、東北地方や日本海側の大部分の地域で記録が見あたらない。北限は福島県南会津または阿武隈山地で、後者では各地で採集例も比較的多い。ブナ帯を主な生息地とするようだが、ときにシイ・カシ帯でも採集されており、またケヤキ枯れ枝から脱出する。朽ち木に集まるほか、本属のものとしては珍しくクリやノリウツギの花上からも得られている。分布図は多くの未発表資料も加えて作成されているので、それらについては別に発表したい。

分布: 本州, 四国, 九州 [基準産地].

ミツモンハナノミ *Mordellaria triguttata* NOMURA

NOMURA, 1961, Tōhō-Gakuhō, Tokyo, (11): 75.

体長3.5-5mm前後。鞘翅の微毛紋は肩部の1対と小楯板後方の紋、それに会合部の条だけから成る。口器と触角、前肢は黄褐色、鞘翅端方もやや黄褐色がかり、鞘翅肩部とその周辺、腹部、中・後肢は多少とも赤褐色がかり。尾節板は前種によく似てかなり短く、端半は急に細まる。前・中跗節の第4節端はやや深く湾入し、後脛節と第1後跗節上部には刻条が現れる。

採集例は非常に少なく、奄美大島産の正基準標本(雌)以外にはトカラ列島中之島からの1雌を知るにすぎない。後者は、前者とは肩部の紋が会合部の紋とつながるなど、いくらか斑紋を違えるようである。

分布: トカラ列島中之島, 奄美大島 [基準産地].

ハナノハナノミ *Mordellaria hananoi* (NAKANE et NOMURA)

Mordella hananoi NAKANE & NOMURA, 1950, Trans. Kansai ent. Soc., 15: 12, fig. 6.

体長4.5-6.5mm。前胸背の暗色紋は比較的明らかで3分割され、鞘翅の微毛紋は肩から端に達する長い1対の金条と会合部上の金条から成る。小顎肢末端節の前縁は内縁より明らかに長い。触角は弱く鋸歯状、5-10各節の内縁は強く弧状。尾節板は端方へゆるやかに細まり、先端は幅狭いが切断状。前・中跗節の第4節端は深く湾入してほぼ二葉状を呈し、後脛節には刻条をほとんど欠くが第1後跗節には不明瞭ながら現れる。雄は前脛節の基部に剛毛群を備える。

日本では局地的な分布を示し、いままでのところ福井県大野市、同県夜叉ヶ池、兵庫県関宮町、奈良県春日山、広島県三段峡、高知県黒尊の6カ所で記録されているにすぎない。ただし、奈良県春日山だけは採集例が多く、しばしば朽ち木に多数が集来するらしい。基準産地である台湾産と比較すると、触角がより太いなどの違いが認められるものの、雄第

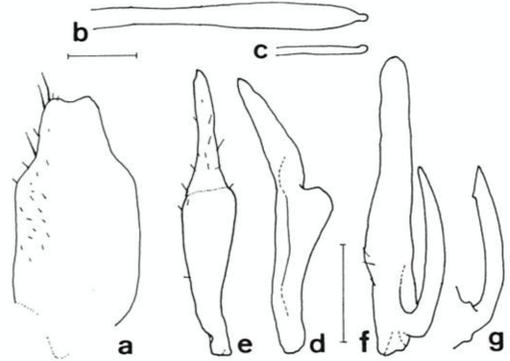


図7. ハナノハナノミ *Mordellaria hananoi* (NAKANE et NOMURA). a: 第8腹板(基部は破損), b: 交尾器中葉片(先端部), c: ditto(側面), d: 交尾器左側葉片(内面), e: ditto(左側面), f: 交尾器右側葉片(内面), g: ditto(左側面). Scales: 0.25 mm.

8腹板や交尾器の形状はほとんど差がない。本種と同じ斑紋パタンの種は東南アジア各地から採集されているが、同種と考えられる個体を検したことがない。また、台湾にも本種に斑紋の酷似した別の1種を産する。

分布: 本州, 四国; 台湾 [基準産地].

カタジロハナノミ *Mordellaria latior* NOMURA

NOMURA, 1967, Ent. Rev. Japan, 19: 9, fig. 4.

体長3.5-4.5mm。鞘翅の白黄～金色微毛紋は基本的に肩部後方から内に向かう斜条、後方の横帯、それに会合部の縦条で形成される。体は厚くて大型、また尾節板は短くて強く平圧され、背面は半円筒形にゆるやかに隆起し、前・中跗節は短く、第4節端はほぼ二葉状を呈するなど、きわだった特徴を備える。雄は前脛節の基部に顕著な剛毛群を備える。

台湾南山溪産の雌を正基準標本として記載され、副基準標本の1つに屋久島産雌が含まれたが、筆者は日本産としてはこの1雌と別の屋久島産1雌、それに石垣島産の1雄しか検したことがない。屋久島産は台湾の副基準標本2雌と比較した限りでは色彩や前胸背の斑紋、触角、尾節板の形などが異なり、はたして本当に同種であるのかどうかは将来の検討に待ちたい。石垣島産は屋久島産と比較すると、性が異なるために難しいが、口器や中・後肢、腹部の色彩、前胸背の紫桃色光沢をもつ微毛から成る暗色紋の形などを違える一方、台湾の副基準標本2雌とはそれらの特徴があまり変わらないので、台湾の種と同じである可能性が高い。ただし、台湾の本種の基準産地からは斑紋が酷似するものの別種と思われる雌雄が得られている。このため、日本および台湾の本グループの分類学的決着には、屋久島産雌ならびに台湾産の本種雄の双方を検査することが必要だろう。

分布: 屋久島, 石垣島; 台湾 [基準産地].

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

紀伊半島のツマグロヒメハナカミキリ類について

窪木 幹 夫

ツマグロヒメハナカミキリ *Pidonia maculithorax* Pic, 1901 は、日光地方から採集された♀個体に基づいて記載された。S. & A. SAITO (1992) は、本種の基準標本を写真で確認し、分類が混乱していたツマグロヒメハナカミキリとムネモンヒメハナカミキリの関係を整理した。すなわち、日光地方～関東地方～中部地方、紀伊半島に分布するツマグロヒメハナカミキリ *P. maculithorax* Pic と紀伊半島弥山に分布するムネモンヒメハナカミキリ *P. misenina* S. et A. SAITO の存在を明らかにした。この論文では、静岡県産と弥山産のツマグロヒメハナカミキリの♂交尾器、腹板、背板などが図示されている。

私は環境庁の許可を得て、1994年、1995年、2000年の3回にわたり、紀伊半島大峰山系の弥山で *Pidonia* の生態調査を行った。その結果の一部は、すでに報告した(窪木, 1998)。今回の調査の結果、紀伊半島に3種のツマグロヒメハナカミキリ類が生息することを確認したので報告する。*P. maculithorax* の基準標本は♀なので、基準産地から採集された標本 (topotypical specimen) の♂と比較すると、紀伊半島の3種のうち、1種は日光の *P. maculithorax* と形態的によく似ていた。他の2種は、これとは異なり、未記載種と判明した。

本文に先立ち、調査に同行して下さったり、各地の標本を提供して下さい下さった平松広吉、井村正行、加藤昭児、川田一之、栗原明雄、水野弘造、中林博之、野中 勝博士、坂上光一、武智昭一、筒井 謙、吉沢尚広の各氏に厚くお礼申し上げる。

1) ツマグロヒメハナカミキリ *P. maculithorax* Pic (図1-3)

3♂♂, 3♀♀, 奈良県吉野郡天川村弥山, 10. VII. 1994, 窪木採集; 3♂♂, 3♀♀, 同地, 15. VII. 1995, 窪木採集; 5♂♂, 5♀♀, 同地, 13-14. VII. 2000, 窪

木採集; 2♂♂, 2♀♀, 同地, 5. VII. 1980, 水野採集; 2♂♂, 2♀♀, 天川村稲村ヶ岳, 8. VII. 1999, 窪木採集; 1♂, 奈良県吉野郡上北山村大台ヶ原ドライブウェイ, 17. VI. 1978, 平松採集; 4♂♂, 3♀♀, 三重県和気郡宮川村大台ヶ原, 7. VII. 1999, 窪木採集。

類はあまり発達せず、角張りは弱い。♂の口器は、前方にあまり発達せず、大腮はより短く、頭楯は横長の四角形。前胸部は大きく、側部は三角形に尖る。♂交尾器中葉片は短い。中葉片先端部の上片板 (dorsal plate) と下片板 (ventral plate) は、ほぼ同じ長さ (図2)。♂の末端節腹板の先端中央の切れ込みはより浅い (図3)。

本種は、広く関東地方から中部地方、紀伊半島そして氷ノ山に生息する。日光湯元、高原山、庚申山、三国峠、峰ノ茶屋、稲子湯、笠取山、犬切峠、富士山 (樹海台、軽水林道、水ヶ塚、高鉢山)、天城山、白骨スーパー林道、高瀬谷、白山釈迦林道、経ヶ岳 (福井県)、大台ヶ原山、稲村ヶ岳、弥山、氷ノ山の標本を確認している。本種の分布域は、3種の中で最も広い。

2) *Pidonia* sp. 1 (図4-6)

3♂♂, 3♀♀, 奈良県吉野郡天川村弥山, 10. VII. 1994, 窪木採集; 3♂♂, 3♀♀, 同地, 15. VII. 1995, 窪木採集; 5♂♂, 5♀♀, 同地, 13-14. VII. 2000, 窪木採集; 3♂♂, 2♀♀, 同地, 5. VII. 1980, 水野採集; 2♂♂, 2♀♀, 天川村稲村ヶ岳, 8. VII. 1999, 窪木採集; 1♂, 奈良県吉野郡上北山村大台ヶ原, 26. VI. 1977, 水野採集; 4♂♂, 3♀♀, 三重県和気郡宮川村大台ヶ原, 7. VII. 1999, 窪木採集。

類はやや角張る。♂の口器は前方に突き出し、大腮はより長く、頭楯は縦長の四角形。前胸部は小さく、両側の三角形の突出は鈍い。♂交尾器中葉片は

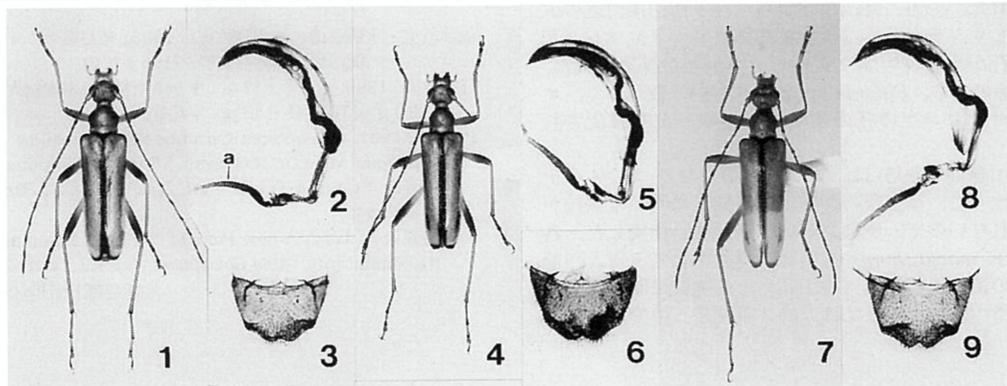


図1-9. 弥山産ツマグロヒメハナカミキリ類3種。1-3, *Pidonia maculithorax* Pic, ♂; 4-6, *Pidonia* sp. 1, ♂; 7-9, *Pidonia* sp. 2, ♂。2, 5, 8, 交尾器中葉片; 3, 6, 9, 末端節腹板; a, 盲管。

短く、強く湾曲する。中葉片先端部の下片板の先端はやや長く、突出する(図5)。♂の末端節腹板の先端中央の切れ込みは浅く、側縁角は鈍い(図6)。

本種は、関東地方南部から東海地方、そして紀伊半島に分布する。塩山市ノ瀬林道、丹沢山、相模大山、箱根山、富士山(太郎坊、高鉢山)、安倍峠、櫛形山、大樺沢、シラビソ峠、恵那山、面ノ木峠、スズラン峠、常念三股、大台ヶ原山、稲村ヶ岳、弥山の標本を確認している。本種の分布は、太平洋側地域に偏っている。

3) *Pidonia* sp. 2 (図7-9)

3♂♂, 3♀♀, 奈良県吉野郡天川村弥山, 10. VII. 1994, 窪木採集; 3♂♂, 3♀♀, 同地, 15. VII. 1995, 窪木採集; 5♂♂, 5♀♀, 同地, 13-14. VII. 2000, 窪木採集; 4♂♂, 3♀♀, 同地, 5. VII. 1980, 水野採集; 2♂♂, 3♀♀, 天川村稲村ヶ岳, 8. VII. 1999, 窪木採集; 1♂, 奈良県吉野郡上北山村大台ヶ原ドライブウェイ, 17. VI. 1978, 平松採集; 4♂♂, 3♀♀, 三重県和気郡宮川村大台ヶ原, 7. VII. 1999, 窪木採集。

頭部はやや縦長で、頬は角張る。♂の口器は発達し、前方に突き出ている。大腿はより長く、頭楯は縦長で、四角形。前胸部は比較的大きく、側部はやや丸みのある三角形。♂交尾器中葉片は長い。中葉片先端部の下片板の先端は長く、鋭く突出する(図8)。♂の末端節腹板の先端中央の切れ込みは深く、三角形(図9)。

本種は、関東地方西部から中部地方、そして紀伊半島に生息する。峰ノ茶屋、笠取山、齋木林道、六本木峠、上日川峠、丹沢山、富士山(高鉢山、樹海台)、天城山、スズラン峠、大樺沢、松川入、面ノ木峠、白骨スーパー林道、島々谷、扇沢、白山釈迦林道、大台ヶ原山、稲村ヶ岳、弥山の標本を確認している。

2000年7月13~14日の調査では、理源大師の座像(標高1,600m)付近のブナ林のバイケイソウやゴトウヅルの花から *P. maculithorax* 1種が採集された。一方、弥山小屋から八経ヶ岳山頂付近のトウヒやシラベからなる針葉樹林帯のオオヤマレンゲの花から3種のツマグロヒメハナ類が採集された。3種のうち、*Pidonia* sp. 2が最も個体数が多く、オオヤマレンゲの花の中で交尾中のペアも確認された。

加藤他(1995)は、関東地方のツマグロヒメハナと比べて、奈良県の個体は、前胸部背に明瞭な黒紋が現れないので、別種あるいは別亜種と指摘した。各地 *P. maculithorax* を用いて交尾させてみると、前胸の黄褐色の個体(弥山産)と前胸部背に明瞭な黒紋を持つ個体(たとえば、峰ノ茶屋産)の交尾が確認

された。また、*Pidonia* sp. 1でも、弥山産の前胸の黄褐色の個体と恵那山産の前胸部背に明瞭な黒紋を持つ個体の交尾も確認された。加藤他が指摘した前胸部背に明瞭な黒紋を持つ個体群が関東山地の3種のツマグロヒメハナ類のどれを指すのか不明である。さらに、比較に用いた関東地方の個体が日光の *P. maculithorax* であったのか、その詳細は報文から判断できない。

S. & A. SAITO (1992) は、弥山や静岡県産の個体を *P. maculithorax* とみなし、それらの♂の末端節腹板と交尾器などを図示している。図示された個体は、共に *P. maculithorax* ではない。図から推定して、弥山産の個体は、*Pidonia* sp. 1、静岡産の個体は、*Pidonia* sp. 2と思われる。

ツマグロヒメハナ類は、体や鞘翅、脚から黒色が縮小し、黄褐色部が広がり、3種ともよく似ている。鞘翅斑紋、前胸部背や触角の色彩などは、群分けや種の区別に使いにくい。しかし、口器やその周辺の形態に顕著な特徴が認められる。このような形態の違いは、成虫の食性や幼虫の生活と関係が深いと推定される。

♂の末端節腹板の形態は、3種のツマグロヒメハナ類を区別する形質として重要である。腹面を頭部の方向から双眼実体顕微鏡で見るとよい。図3, 6, 9は、腹板を正面から撮影したものである。鞘翅斑紋や点刻、翅端の形態には、個体変異があり、3種の区別点には使用しにくい。また、大腿を閉じた標本と開いた標本では比較しにくいので、大腿をやや開き、同じ状態にして比較する必要がある。

中国地方からもツマグロヒメハナ類が記録されている。手元にある水ノ山の標本は、3種のツマグロヒメハナ類のうち *P. maculithorax* に最も似ている。中部地方や紀伊半島の個体とは、前胸部や鞘翅端の形態で区別できる。中国地方の個体群を含めツマグロヒメハナ種群の再検討を行いたい。なお、*Pidonia* sp. 1と *Pidonia* sp. 2については、新種として記載を準備中である。

引用文献

- 加藤敦史・水野弘造・岩田隆太郎, 1995. 奈良県のカミキリムシ. 関西甲虫談話会資料, (10): 1-140.
 窪木幹夫, 1998. ハムシ上科カミキリムシ科. 日本動物大百科10昆虫III, 141-145 pp. 平凡社, 東京.
 PIC, M., 1901. Coleopteres Cerambycides recueillies au Japon par M. le Dr. HARMAND, Ministre plenipotentiaire de France a Tokio. *Bull. Mus. Hist. nat., Paris*, 7: 337-342.
 SAITO, S. & A. 1992. A new *Pidonia* from Mt. Misen and its cohabitants. *Acta Coleopterol. Japon.*, (2): 18-25.
 (東京都世田谷区)

日本におけるエゾコガムシの分布

林 成多・八木 剛

エゾコガムシ *Hydrochara libera* (SHARP) は国内では北海道、本州、九州に分布し (SMETANA, 1980; 野村・林, 1998), その産地は局地的である。しかし、分布域の中心は明らかに北に偏っており、北海道や本州北部の湿地では比較的、普通にみられる。また、本種は最終氷期の泥炭層 (例えば、長野県の野尻湖層) から化石が産出することから、氷期には現在より分布を広げていたと考えられる。筆者らは化石の検討を進める一方で、本種の分布を解明すべく各地で調査を進めてきた。本報告では、文献および新産地の記録をまとめ、分布図を作成した。さらに生息環境についても報告する。なお、いくつかの標本データは兵庫県立人と自然の博物館〔人博〕と略記する) および大阪市立自然史博物館〔OMNH〕と略記する) の収蔵標本に基づいている。検討の機会をいただいた両館にお礼申し上げる。

文献記録

SMETANA (1980): Sapporo, Japan; Tokyo. 須田 (1991): 栃木県今市市田島弁天沼。佐藤 (1991): 栃木県那須町大島萩久保; 那須町漆塚穂積。杉浦・大築 (1993): 三重県島ヶ原村切下。林 (1996a): 青森県東通村尻屋崎; 同県東通村荒沼; 同県むつ市八忠沼。林 (1996b): 新潟県小国町田島峠。福島県ガイドブック編集委員会 (1997): 新潟県福島潟。野村・林 (1998): 佐賀県七山村池原。



エゾコガムシの分布。●: 標本を確認した産地。
○: 文献記録による産地。

標本データ (新記録のみ)

59 頭, 北海道豊富町兜沼, 標高 10 m, 31. VII. 1992, 林採集。2 頭, 北海道鶴居村赤沼, 標高 5 m, 24. VII. 1991, 八木採集 [人博]。4 頭 (テネラル), 北海道釧路町達古武沼キャンプ場, 10. VIII. 1997, 林採集。5 頭, 北海道苫小牧市美沢, 17. VI. 1991, 八木 剛採集 [OMNH]。1 頭, 青森県市浦村十三湖烏谷川河口, 22. XI. 1981, 衣笠弘直採集 [OMNH]。11 頭, 青森県中里村十三湖南岸, 15. VIII. 1992, 宮武頼夫採集 [OMNH]。18 頭, 青森県車力村牛瀧池, 標高 10 m, 30. IX. 1992, 八木採集 [人博]。1 頭, 青森県車力村袴形池, 標高 15 m, 30. IX. 1992, 八木採集 [人博]。4 頭, 青森県木造町平滝沼, 標高 15 m, 2. X. 1992, 八木採集 [人博]。2 頭, 宮城県小野田町びん沼東側の沼, 標高 350 m, 16. VI. 1992, 八木採集 [人博]。1 頭, 新潟県小国町えんまが沢, 30. VIII. 1996, 林採集。21 頭, 新潟県吉川町坪野, 18. VIII. 2000, 林採集。12 頭, 長野県大町市中綱湖付近の廃田, 14. VII. 1998, 林採集。

分布

北海道の平野部〜丘陵地には広く分布していると思われるが、実際に確認できた産地は少なかった。新潟県や栃木県では複数地点での分布が確認されたことから、関東以北の未確認の県にも分布している可能性が高い。長野県以西での分布は局地的であると考えられるが、中部地方での産地はさらに発見されるかもしれない。一方、国外での分布は中国東北部と東部、北朝鮮、沿海州南部が知られている (SMETANA, 1980)。

生息環境

本種が得られた環境は、ほとんどの産地は水深が約 20-50 cm ほどの水生植物の豊富な止水域である。しかし、その立地環境は多様で、ヨシやマコモを主体とする低層湿原や、ミズゴケ湿地、沼、溜池、放棄水田などである。特に本州では、産地の多くは放棄水田である。一方、本種の近縁種であるコガムシ *Hydrochara affinis* (SHARP) は河川敷の水たまりや水田に生息し、灯火で得られることも多い。コガムシはより不安定な水域に生息すると考えられる。エゾコガムシとの同一水域での混棲はこれまでのところ確認されていない。

同定について

本種の肢と胸・腹部腹板は黒色で、近縁種のコガムシはその部位が赤褐色〜黄褐色をしていることから容易に識別できる。しかし、エゾコガムシのテネラルは肢と胸・腹部腹板が黄褐色であるため、テネラルの個体を同定する際には注意が必要である。この場合の区別点は、上翅側方の粗い点刻の列がほぼ 1 列に並ぶのがエゾコガムシ、乱れた 2 列状であるのがコガムシである。この部位は、化石標本の同定

の際にも有用である。

参考文献

- 福島潟ガイドブック編集委員会, 1997. 福島潟ガイドブック「潟の野遊び」. 文一総合出版, 111 p.
 林 成多, 1996a. 下北で採集したネクイハムシ・ゲンゴロウ・ガムシ(まとめ). うんころがし, (77): 2-3.
 林 成多, 1996b. 新潟県から記録されたヒゲトコブゲンゴロウとエゾコガムシ. 月刊むし, (310): 8.
 野村周平・林 成多, 1998. エゾコガムシの九州における発見とその生息環境. 月刊むし, (329): 14-15.

- 佐藤光一, 1991. 栃木県における甲虫数種の記録. インセクト, 42(2): 71-73.
 SMETANA, A., 1980. Revision of the genus *Hydorochara* BERTH. (Coleoptera: Hydrophilidae). *Mem. ent. Soc. Can.*, 111: 1-100.
 須田 享, 1991. 栃木県におけるガムシ科甲虫2種の記録. インセクト, 42(1): 29-30.
 杉浦真治・大築正弘, 1993. 近畿地方でエゾコガムシを発見. 月刊むし, (265): 36-37.

(林: 兵庫県三田市)

(八木: 兵庫県立人と自然の博物館)

○九州におけるクロアリツカエンマムシとコブナシコブスジコガネの記録

標記の種は九州からの記録が見当たらない, または稀な種であるが, 熊本県において採集しているので記録しておく。

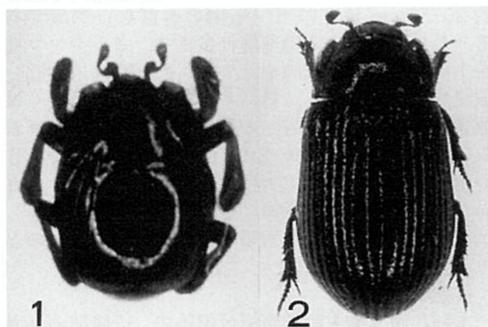
1. *Hetaerius optatus* LEWIS

クロアリツカエンマムシ (写真1)

1頭, 熊本県上村白髪岳(標高1200m付近), 30.V.1999, 採集・同定・保管は筆者。

古くなったブナの立ち枯れの地表から50cm位のところのぼろぼろの樹皮を剥がして採集した。アリどころか落ちてくるのはミズばかりで, 他の虫の姿は全く見られない場所であった。

さて, この個体だが, ÔHARA (1994) の再記載の図と背面の様子がずいぶん違っていた。まず, 背面の長毛を欠き, 図示された神奈川県産の標本に近いが, 80倍の実体顕微鏡で見ると短毛すら欠いていた。また, 前胸背の前縁から後方に向かって1/3程度付近までは, びっしりと大点刻におおわれ, その間隔は接するほど近い。それから後方に向かって点刻はだんだん小さくまた粗になっている。上翅側縁は肩部から1/4付近で軽く曲がって, 突出しているように見える。



2. *Trox nohirai* NAKANE

コブナシコブスジコガネ (写真2)

1頭, 熊本県上村白髪岳(標高1,100m付近), 10.VII.1999, 採集・同定・保管は筆者。

ブラックライトに飛来した。付近は, ブナやモミ, ツガ, イヌシデ等の原生林である。すでに当地からの記録(大塚, 1988)がある。

参考文献

- 芳賀 馨, 1997. クロアリツカエンマムシを福島県高町で採集. 甲虫ニュース, (125): 12-13.
 ÔHARA, M., 1994. A revision of the superfamily Histeroidea of Japan (Coleoptera). *Ins. Matsum. n.s.*, (51): 283 pp., 166 figs., 42 tabs.
 大塚 勲, 1988. 白髪岳自然環境保全地域及び周辺地域の昆虫相. 白髪岳自然環境保全地域調査報告書, 環境庁自然保護局。

(福岡県大野城市, 城戸克彦)

○トカラビロウドコガネ屋久島に産す

2000年5月にアカビロウドコガネと思われるコガネムシを屋久島で採集した。しかし発生期が著しく早いので詳細に調べたところ, トカラビロウドコガネ *Maladera satoi* NAKANE (写真) であることが分かった。2年前の同時期に採集していた標本も見直したところ, やはりトカラビロウドコガネであった。ここに, 本種の屋久島からの採集例を記録しておく。



鹿児島県熊毛郡屋久町麦生: 1♂1♀, 9.V.1998; 1♂, 9.V.2000; 4♂♂3♀♀, 31.V.2000; 1♂, 10.VIII.2000. いずれも筆者採集。

なお, 筆者はこれまでに, 屋久島の平地で本報告のトカラビロウドコガネと別報告のマルガタビロウドコガネ *Maladera secreta* (BRENSKE), 山地でビロウドコガネの近似種ヤクシマビロウドコガネ(仮称) *Maladera* sp. を採集している。しかし, 注意して採集しているにもかかわらず, 今までのところ屋久島から記録のあるアカビロウドコガネとビロウドコガネの2種を採集するにはいたっていない。

(鹿児島県屋久島, 久保田義則)

○海上漂着材で見いだされたフタモンウバタマコメツキの幼虫

2000年8月中旬から9月にかけて、石垣島やその近海を通過して台湾やその近海を横断する台風が相次いで発生した。特に台風10号(8月22日~23日)は、台湾島の中央部を横断して、現地に大きな災害をもたらした。その影響と思われるが、9月に入って西表島や石垣島や竹富島などの海岸に大量の流木が漂着し、旅客船や漁船との接触事故が多発した。

筆者の一人である深石は、これらの流木と共に漂着した昆虫類の調査をしてきたが、その中にコメツキムシの幼虫が含まれていた。漂着場所は石垣市仲筋の海岸で、直径10cmくらいの樹皮の一部が残っている丸太状の朽木で、樹種は不明である。

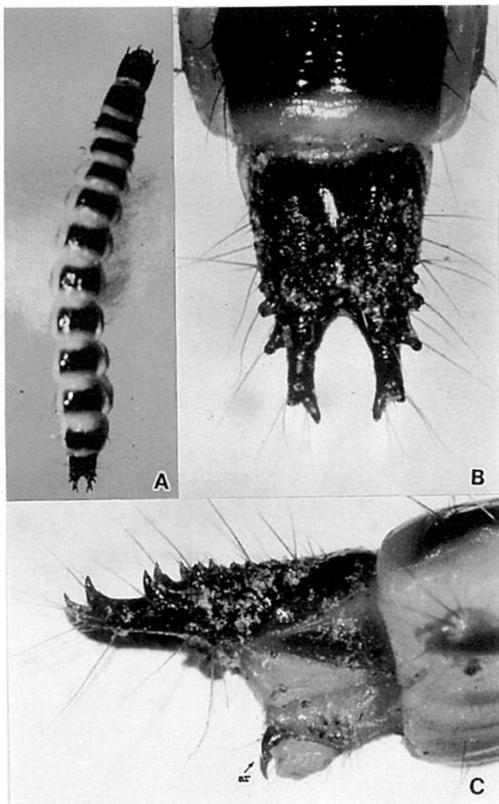


図1. A, フタモンウバタマコメツキの若幼虫、死亡個体で関節が伸びている; B, 同幼虫の第9腹節背面; B, 同幼虫の第9腹節と第10腹節の側面(arはarmature)。

幼虫は図示(図1A)したような体長27mm内外の若齢虫で、採集時にはすでに死亡していて、腹環節は伸長した状態であった。この個体の頭部、第9腹節の背面(図1B)や側面(図1C)などの形態を詳しく調査した結果、フタモンウバタマコメツキ(*Cryptalaus larvatus*)であることが判明した。本種は台湾や中国南部からベトナム地域、琉球列島の全

域から本州の関東地方まで広く分布が知られている種である。成虫では産地によって若干の個体変異がみれるので、どのあたりに分布した個体であるかのおよその見当はつけられるが、幼虫ではそこまでは不明である。しかし、同じ場所の漂着材の中にタイワンヒノキが混ざっており、台湾からであることはほぼ間違いないものと思われる。

今まで、海上からの漂着材で見いだされたコメツキムシ類の例はほとんど知られていないし、今回は死亡した個体であったが、条件によっては生きて漂着した可能性も考えられるので、ここに記録することにした。

調査標本: 若齢幼虫(体長は約27mm)、石垣市川平仲筋海岸, 20. IX. 2000, 深石採集。

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

(沖縄県石垣市, 深石隆司)

○屋久島から採集されたゾウムシの1種

最近筆者は、屋久島で *Sphaerorchestes kawasei* MORIMOTO & MIYAKAWA を採集したので報告する。

1頭、鹿児島県屋久島上屋久町西部林道, 11. VIII. 2000, 稲垣順子採集。



本種は、三重県熊野市桶ヶ崎で採集された2個体の標本を基に記載された種である(MORIMOTO & MIYAKAWA, 1996)。その後、和歌山県熊野川町田長谷から1頭が記録されている(的場, 1999)が、屋久島からは初めての記録と思われる。ライトトラップに飛来したところを採集した。

文末ではあるが、同定ならびに資料を提供くださった市橋 甫氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

的場 績, 1999. 和歌山県産ゾウムシ目録. 和歌山県立自然博物館館報, (17): 29-51.

MORIMOTO, K. & S. MIYAKAWA, 1996. Systematics of the flea weevil of the tribe Ramphini (Coleoptera, Curculionidae) from East Asia. I. Description of new taxa and distribution data of some species. *Esakia*, (36): 61-96.

(三重県四日市市, 稲垣順子)

ドのひとつときであった。飛来した甲虫は、蛾に比べればはるかに少なかったが、かなりの種類であり、ニセヤツボシカミキリ、ムラサキスジアシゴミムシ、ヒゲナガマメゾウムシ、ヒメクロシデムシなどが飛来した。すべては独特の雰囲気の中で進行し、勢いでガロアミズギワゴミムシを60頭以上採集して場を盛りあげた豪傑もいた。

翌日は独自行動となり、池でゲンゴロウをゲットした人や、温泉付近でのトラップ採集で成果を上げて帰った人もいたようだ。このような楽しい機会を提供して下さった、堀さんをはじめとする関係者の方々に深く感謝申し上げたい。

(神奈川県横浜市、大木 裕)

◇会員動静◇

(会計担当, 齊藤明子)

◇会計報告◇

1999年度決算(1999年1月1日~12月31日)

収入	予算	決算	増減
前年度繰越金	5,600,000円	5,763,031円	163,031円
会費	3,300,000	3,536,000	236,000
広告費	60,000	60,000	0
出版物売上金	98,000	98,000	0
雑収入	0	25,420	25,420
合計	9,058,000	9,482,451	424,451

支出	予算	決算	増減
会誌印刷費(Elytra)	2,000,000円	2,914,590円	914,590円
会誌印刷費(甲虫ニュース)	500,000	583,116	83,116
会誌送料	600,000	591,449	-8,551
通信費	200,000	27,920	-172,080
事務費	120,000	295,315	175,315
大会助成費	30,000	30,000	0
予備費	50,000	56,700	6,700
次年度繰越金	5,558,000	4,983,361	-574,639
合計	9,058,000	9,482,451	424,451

(会計担当, 齊藤明子)

甲虫ニュース 第132号

発行日 2000年12月25日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号,有頭ダブル針も出来ました。その他,採集,製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社